様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１３４６４

研究課題名（和文）室町末期成立の編纂抄物の資料的性格についての研究

研究課題名（英文）A study of Compiled Shomono made at the end of Muromachi period

研究代表者
山本　佐和子（YAMAMOTO, Sawako）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：００７３８４０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：「抄物（しょうもの）」は、主に室町期〔15～16C〕に、禅僧や公家の学者が講義に基づいて作った漢籍や漢文の注釈書である。講義の言葉に由来する片仮名漢字交じり文で書かれており、当時の日本語の貴重な資料となっている。16世紀半ばには、先学の抄物を集めた編纂抄物が作られるようになる。
本研究では、編纂抄物の日本語史資料として活用を促すため、特徴的な言語事象や、誰がいつどのような目的や方法で誰のために作成したかを調査・考察した。その結果、言語事象では、江戸期の漢籍国字解や室町期の平安和文注釈書に共通する表現を見出す等、成立経緯が言語に与える影響を指摘した。併せて、新たに言語資料となる抄物を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、日本語史資料として用いられていなかった編纂抄物から未知の言語事象を報告し、抄物の言語資料としての可能性を示した。抄物は言語規範が緩く、通俗的な語彙や旧来の文法では誤りとなる新規の語法が使われやすい。一資料ごとに新たな語彙・語法が見つかることも多く、資料研究の継続は欠かせない。
また、各所蔵先における抄物の保存・継承の一助となるよう、調査後は速やかに紹介して研究利用を促すと共に、資料の画像データ作成費用を負担する等した。特に、編纂抄物は大部で、所蔵先でのデジタル画像の作成が後回しになりがちである。言語調査には全巻複写が必須で、複写を依頼し画像を撮影して貰うことで、保存・管理をサポートした。

研究成果の概要（英文）：“Shomono”is a commentary on Chinese books and texts made by Zen priests and scholars of the nobility based on lectures, mainly during the Muromachi period. Written in Katakana-Kanji mixed sentences based on the words of the lecture, it is a valuable resource for Japanese language in the Muromachi period.In the middle of the 16th century, “Hensan shomono” were made by editing the shomono written by senior scholars.
In this study, in order to promote the use of “Hensan shomono”as a Japanese history material, we considered language phenomena and, investigated and considered who created “Hensan shomono” for whom, when, for what purpose, and for whom.
As a result, we found expressions common to “Kanseki kokujikai” in the Edo period and commentary on Japanese classical literature in linguistic phenomena. At the same time, I reported “Shomono”, which is a new language material.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史　抄物　編纂抄物　杜詩　漢籍国字解　東坡詩　古文真宝後集

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

抄物は、室町期から近世初頭にかけて作成された、口頭での講義（音声言語）と何らかの関わりを持つ、古典注釈書の一種である。当期の話し言葉の資料であり、室町期の三大口語資料（抄物・キリシタン資料・狂言）のひとつとされてきた。抄物では、講義との関係性が、反映される言語の性格と関わることが知られている。そのため、従来から、言語を特定の個人に帰すことが可能な、講義の筆録に基づく「聞書（ききがき）」や、講義を模した文体で書かれた著作の「抄（しょう）」が言語資料として広く用いられてきた。

約 150～200 年間と推定される口語体抄物の作成時期〔15～16 世紀〕の後半、16 世紀半ばから増えるのが、先学による複数の抄物を編纂、集成した「編纂抄物（「集成抄物」「取り合わせ抄物」とも）」である。編纂抄物にも、片仮名・漢字混じり表記で口語的な「仮名抄」を多く含むものはあるが、言語史資料としての利用は盛んではない。中には、聞書である先行抄が散逸して、編纂抄物の形で唯一現存する抄物もある。

研究代表者は、応募者は平成 21(2009)年から、林宗二〔りんそうじ・1498-1581〕の絶筆、建仁寺両足院蔵「杜詩抄」〔20 巻 25 冊、元亀元(1570)-天正 9(1581)年書写〕の調査を行い、定説の五山僧雪嶺永瑾〔1447 頃-1537〕の講義の聞書ではなく、諸家の杜詩注釈を集めた編纂抄物であることを明らかにした（山本 2013)。「杜詩抄」には、いずれも先行抄に由来すると考えられる、文末表現「ヂャ」や濁音形「候゛」など、五山・博士家系抄物では稀な言語事象が観察できる。

２．研究の目的

本研究の目的は、編纂抄物（集成抄物）について、特徴的な言語事象を手がかりに、先行抄との関係や編纂目的を推定することによって、言語資料としての性格を明らかにし、言語研究での利用を促すことである。主な目的は次の 3 点である。

（1）言語研究を先駆とした資料研究

本研究では、国語学の手法である、言語事象を手がかりに文献の資料的性格を解明するという、言語研究を先駆とした資料研究を行う。編纂抄物の中には、先行抄が散逸しており、当該資料の中にも出典表示がないことから、文献学的観点から評価が難しいものがある。言語事象を手がかりとすることで、成立経緯や受容のされ方の推定が可能となる。

（2）抄物の史的変容の解明

編纂抄物では、注釈内容だけではなく、先人の口調・文体をも継承する傾向が認められる。一方で編纂抄物が作られるようになる大永〔1521-1526〕頃には、講義に基づかない、著作物として書かれて注釈書として参照されるための抄物も増加する。近世の「諺解」「国字解」との連続性も視野に、抄物の作成や受容に生じた史的変容と、その言語への影響を考える。

（3）新たな抄物の発掘・整備

抄物では、一語・一形式の意味用法でも、抄物ごとに差異が見られる場合がある。未調査の抄物から，新たな言語事象が見つかる可能性は十分にあり、資料研究の継続は必須である。

３．研究の方法

本研究では当初、林宗二とその周辺、および、笑雲清三による、以下の編纂抄物を調査することを目的として、研究を開始した。研究代表者が本課題以前から調査していた、林宗二・宗和らによる抄物に加えて、笑雲清三の編纂抄物を加えたのは、笑雲が、宗二らに先駆けて「四河入海」等の編纂抄物を複数作成しており、宗二らの抄と比較することで、編纂抄物共通の作成目的や言語的特徴を考える手がかりとなると考えたためである。

当初、調査対象とした以下の抄物 5 点は、いずれも室町期に広く読まれた漢籍を注釈対象（原典）としている。原典を同じくする聞書抄物が複製・公刊されており、その解題で編纂抄物についても言及があって、その成果を参照することができる。また、抄文の比較も可能である。

(1) 建仁寺両足院蔵「杜詩抄」〔20 巻 25 冊，元亀元(1570)-天正 9(1581)年，林宗二ほか 4 名書写〕：芳賀（1945）で、五山の詩僧雪嶺永瑾講の聞書とされるなど、文学史では早くから注目されていた。高見（1977）では、書誌の報告と共に、「杜詩続翠抄」の殆どが「杜詩抄」に引用されていることが指摘されている。言語研究資料としては、悪筆と本の状態の悪さ、先行抄の出典表示がないこと等の理由で、殆ど用いられてこなかった。

(2) 建仁寺両足院蔵「東坡抄」〔25 巻 30 冊，天文 9(1540)-天正 2(1574)年，林宗二書写〕：鈴木（1976）で言及され、「続翠抄」や「天下白」を併せたようとされるが、「杜詩抄」と同様、詳しい調査はなされてこなかった。　本抄については、奥書と筆跡から、天文 9-11 年に林宗二が作成を始め、天文末～弘治頃に宗和が一部を作成、天正年間に宗和著述の４巻を宗二が書写し直していることを把握している。

(3) 建仁寺両足院蔵「黄氏口義」〔20 巻 20 冊，永禄 3-10(1560-1567)年，林宗二書写〕：大塚

（1992）で、現存の黄山谷の詩の抄物数種とそれぞれ一致する本文があることから、林宗二が独自の立場で先行の講本を参照して纏めたものと指摘されている。蔦（2015）では、現存の山谷抄各種と対照した結果、先行抄の追及には限界があることが示されている。「杜詩抄」「東坡抄」と、本の状態・筆跡は似通い、共通の環境で執筆されたことが窺われる。

(4) 塩瀬宗和「三体詩絶句抄」〔天文 15(1546)年林宗和奥書，写本：建仁寺両足院蔵 3 冊，刊本：古活字版・江戸初期整版 6 巻 6 冊，『抄物小系』に整版の影印〕抄物の言語を初めて体系的に記述した湯澤（1929）で、資料として利用されたものの、その後、聞書・抄のように特定個人の言語でないことを理由に、殆ど用いられなくなった抄物である。応募者は、両足院蔵の写本を調査。先行研究では、編纂者の林宗和自筆本とされるが、筆跡等から自筆本とは考えにくい。写本と刊本の本文は極めて近い。

(5) 笑雲清三「古文真宝後集抄」〔大永 5(1525)年笑雲清三奥書，写本・古活字版・整版多数〕：柳田（1992）で、伝本の一部に、元となった４つの先行抄が明記されているという報告がある。「古文真宝後集」の抄物では、最も流布したものであるという。

４．研究成果

本研究では、編纂抄物の成立時期・成立経緯や、特徴的な言語事象に着目することで、抄物の作成・受容の様相が、当時の社会や文化の変化に従って変容していくことを明らかにした。

当初、調査対象とした抄物のうち、本研究期間内で考察できたのは、(1)建仁寺両足院蔵「杜詩抄」と(5)笑雲清三「古文真宝後集抄」に留まるが、研究開始当初には視野に入れていなかった禅籍抄物や、近世の漢籍国字解、抄物と同時期の和文注釈書、書入れ抄物について、(1)・(5)に関する考察から発展させて把握することとなった。以下、概要を述べる。

(1)抄物成立史上末期に増加する林下の禅籍抄物の調査・考察

林下（五山叢林以外の禅寺）の「禅籍抄物」は、編纂抄物と同じく抄物作成史上末期のものが多い。本研究で考察したのは、次の 2 点の禅籍抄物である。

まず、山本（2018）では、「古則聞書零本」（京都大学大学院文学研究科図書館寿岳文庫蔵）について、密参録を注釈対象とする講釈を筆録したものであり、同時期の狂言との関連を示すという、臨済宗大徳寺派の同種の文献中では稀な内容を有していること明らかにした。

また、國學院大學図書館蔵「木杯余瀝」は、「古則聞書」と同じく大徳寺派系の語録鈔である。先行抄を原典としている点や、抄物で稀な文末形式「ヂャ」を用いる点は、「杜詩抄」や近世初期の「御水尾天皇百人一首抄」と共通する。

(2)他の資料群と抄物との関連性

(2)-①近世の漢籍国字解との関係

近世の漢籍国字解は、抄物とは作成者も学問の系譜としても連続性はないものの、講義と関わりを持つ漢籍注釈書としては後継にあたる。山本（2019）では、漢籍国字解の文末表現の用法を記述し、抄物の文末表現の統語的性格を解明する手掛かりを得た。同時に、抄物や国字解では、注釈の主な内容である語釈や解釈（注釈内容）で用いられる言語と、それらを提示するための筆者・講者の言語が区別できる場合があることを見出した。

近世の漢籍国字解の文末表現については、嵩山房刊『唐詩選国字解』など一部の漢籍国字解が、繫辞「デアル」を多用する先駆的文献として知られてきた。しかし、『唐詩選国字解』の「である」の多くは、原典の当代語訳（解釈）を示す用法で、別の国字解を改変して作成される際に追加されたものであって、現代語の「デアル」のように広く名詞述語文を作るものとして当該文献で使われているわけではない。同じく、『唐詩選国字解』の元となった国字解を利用して作成された漢籍の平仮名付訓注釈書（『唐詩選画本』『唐詩選和訓』）では、『唐詩選国字解』の「である」と同じ用法で、「～となり」（引用ト＋繫辞ナリ）が用いられている。文末表現「である」の統語的性格は、「～となり」と同等であり、国字解や抄物の文末表現では、繫辞（ゾ・ナリ・ヂャ・デアル）が引用表現の一種で用いられていると考えられる。

(2)-②和文の注釈書との関係

さらに、山本（2021）では文末表現「～トナリ」の語史の考察から、抄物と和文の注釈書との関連性も見出した。

(2)-①でも述べたが、文末表現「～トナリ」（引用ト＋繫辞ナリ）は、近世以降の漢籍平仮名付訓注釈書（鈴木 2006、参照。『経典余師』やそれに倣って作られた『唐詩選和訓』等をいう）などの通俗的な注釈書・学習書で多用されている。建仁寺両足院蔵「杜詩抄」には、「ヂャ」や「ゾウ〈候゛〉」など一般の仮名抄には殆ど見られない文末表現が使用されるが、「～トナリ」もその一つである（約 220 例使用）。

文末表現「～トナリ」は、応仁の乱以降、即ち、口語的な仮名抄の多くが作られた時期と同時

期に成立した「源氏物語」「伊勢物語」等の和文の注釈書で、原典の解釈を示す用法で多用されるようになったものである。この文末表現を用いることで、前接する内容は原典の一節を引用するに等しい当代語訳であることを明示でき、同時に、提示される意味・用法が古典語一般に応用できる辞書的なものではないという注意を促すこともできる。

和文の注釈書において、この種の定型的な文末表現が多用された要因には、当時の言語変化（亀井 1957）及び、古典の受容層の拡大・変容による注釈書の質的変容（伊井 1980）が関わっていると考えられる。抄物を多く作成した清原宣賢〔1475-1550〕が作成した「伊勢物語惟清抄」にも、「～トナリ」は和歌の当代語訳を示す用法で多用される。「杜詩抄」の主要な作成者である林宗二も、「源氏物語」の注釈書「林逸抄」を作成している。「杜詩抄」の「～トナリ」は、室町期当時「抄物（ショウモツ）」と呼ばれた和文の注釈書での用法が流用されたものだと考えられる。

近代以降、言語資料として再評価された抄物は、同時期の注釈書「ショウモツ」から切り離して扱うことが定着している。「～トナリ」という一形式の語史であるが、抄物の成立背景や受容の様相、ひいては言語資料としての性格は、抄物作成期と同じ時期の、古典講釈・注釈史の中で捉え直す必要があることを窺わせる。

(3) 抄物の史的変容

(3)-①「東坡詩」の書入れ抄物

(2)-②で扱った和文の注釈書が、室町末期～近世初期に公家・武家に広く受容されていたことを踏まえて、伝本の状況から受容層が共通する可能性の高い、同時期の「東坡詩」（蘇軾の詩）と「古文真宝後集」の抄物について、新型コロナウイルス感染症前の 2019 年より所蔵先での現地調査を開始した（現在も継続中）。「東坡抄」「古文真宝後集抄」は、原典を同じくする抄物が多く伝存しており、伝本も豊富で、出典となった先行抄の手がかりが残るものもある。

「東坡抄」に関しては、編纂抄物である米沢市立図書館蔵『増刊校正王状元集注分類 東坡先生詩』（残 7 巻 8 冊、朝鮮活字本を台紙に張り付け、抄文を書いた料紙と綴じ合わせたもの）と、同時期の書入れ仮名抄である大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類 東坡先生詩』（25 巻 28 冊、元刊本の書入れ抄物）について調査を行い、現在までに、成立経緯が比較的明らかな後者について書誌的考察を報告している（山本 2020）。

中之島図書館蔵『東坡先生詩』の書入れ仮名抄は、書入れ抄の筆者である文英清韓〔1568-1621 頃〕の識語から、五山の坡詩講義を正式に伝授・伝領する目的で作成されたことが明らかな抄物である。一方、米沢市立図書館蔵本は「米澤善本」の一書であり、並外れた大型本で、内容からも、身分の高い受容者への献上を目的に作成されたことを窺わせる。16 世紀末には、同一学統内で継承されるべき前者のような抄物と、学統の外に向けて、諸説を一覧しやすくまとめた後者のような抄物とが作られるようになっていたことが明らかである。

また、従来、編纂抄物は末期の衰退を示す形態とされてきた。しかし、複数の先行注釈書を集成・編纂したり、先行注釈書を「原典」として平易な注釈書を作ったりといった営為は、禅籍抄物や和文の注釈書、漢籍国字解に広く認められ、受容をより意識した積極的な変化と見ることが出来る可能性が高い。

(3)-②受容者からの要請による「私抄」の発生

「古文真宝後集」の抄物については、(3)-1 の中之島図書館蔵『東坡先生詩』書入れ抄物の作成者である文英清韓の抄と推定されていた抄物について、大永・天文期に抄物を作成、書写・収集した彭叔守仙〔1490-1555〕による著作の抄物（抄）であることを明らかにした（山本 2022b）。また、上記の朝鮮活字本『東坡先生詩』と同じく米沢善本中の一書の、笑雲清三「古文真宝後集抄」は、南化玄興〔1538-1604〕から上杉家重臣の直江兼続に送られたという識語を持つことで有名である。この、作成経緯と時期が明らかな米沢市立図書館蔵本を手がかりに、笑雲清三抄の諸本について伝本調査を開始し、次期研究課題に引き継ぐこととした。

「彭叔守仙抄古文真宝抄」は、能登守護畠山義総〔1491-1545〕の依頼で、約 1 年という短期間に作成されたことが、伝本の一つである仁和寺蔵本の奥書より明らかである。彭叔守仙が、短い時間で本抄を作成できたのは、弟弟子の吉甫□興〔生卒年未詳、法諱の上字□は未詳〕が鸞崗瑞左私鈔等複数の先行抄を書入れた「古文真宝」を入手し（彭叔自筆詩文集『猶如昨夢集』中巻）、参照できたためと推定できる。山本（2022a）では、吉甫書入れ抄の系統に属する書入れのある「古文真宝後集」3 点を見出し、うち 1 点の仮名抄部分を翻刻した。

また、彭叔守仙抄は、現存写本 2 点のうち 1 点で「私抄」と呼ばれている。「私抄」という用語は、従来の研究では殆ど注目されてはいない。しかし、林宗二らによる編纂抄物「杜詩抄」「東坡抄」なども、「私抄」と称する。この種の編纂抄物の発生には、漢籍や日本古典を平易な仮名文で理解したい受容層の拡大があることが推定される。すなわち、(3)-1 で述べた学統の外に向けた抄物である。これら「私抄」と称する抄物は、当代的な口語・俗語語彙を交えた通俗的な文

語文体を特徴とするが、そのような言語のほうが、話し言葉（音声言語）に近い文体より、時代や地域を超越しやすいためと考えられる。抄物の作成目的や受容層の変化が、言語にも反映していくことは当然予想され、今後、詳細の解明が求められる。

(4)抄物の研究促進のための活動

このほか、本研究期間内には、次の 2 度の抄物研究促進のための講習会で講師をつとめ、抄物を主な資料とした日本語学の研究史と、それを踏まえた今後の可能性、および、抄物を日本語史資料として用いる際の具体的な方法について、若手研究者向けにレクチャーし、抄物研究者層の拡大に努めた。

・訓点語学会抄物講習会（2017 年 8 月 23 日於京都大学）：論題「抄物の言語研究」
・科研費「抄物の文献学的研究」（研究代表者・大槻信氏）抄物講習会（2019 年 3 月 17 日、於大阪大学中之島センター）：論題同。

以上の成果を踏まえ、本研究課題後には、編纂抄物（集成抄物）の資料的性格の解明に戻り、抄物の史的変容が、言語面にどのような影響をもたらしたかを考察していく。

【参考文献】

伊井春樹（1980）『源氏物語注釈史の研究　室町前期』桜楓社
大塚光信（1992）「山谷抄」『続抄物資料集成　解説』清文堂出版
亀井孝（1957）「言語史上の室町時代」『図説日本文化史大系』4
鈴木博（1976）「四河入海について」『抄物資料集成　解説』清文堂
鈴木俊幸（2006）「『経典余師』考（続）」『中央大学文学部紀要』209、73-117
高見三郎（1977）「杜詩の抄―杜詩続翠抄と杜詩抄―」『山辺道』21、26-48
蔦清行（2015）「両足院所蔵『黄氏口義』の構成と成立について」『訓点語と訓点資料』135，19-40
芳賀幸四郎（1945）『東山文化の研究』河出書房
柳田征司（1992）「桂林徳昌一元光演聞書『古文真宝抄』彦龍周興講某聞書『古文真宝抄』について」『続抄物資料集成　解説』清文堂
山本佐和子（2013）「「抄物」と中世室町期の文化―両足院蔵「杜詩抄」の成立を手がかりに―」『「異文化共生学」の構築』京都府立大学重点戦略研究費成果報告書（研究代表者 岡本隆司），1-12
山本佐和子(2018) 「資料紹介　京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵「古則聞書零本」解説・翻刻」『同志社国文学』88，55-66
山本佐和子(2019)「嵩山房刊「唐詩選」関連書籍群における注釈表現の諸相」『国語語彙史の研究』38，185-204
山本佐和子(2020)「大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』の書誌的考察―東坡詩の抄物の受容と展開の一例―」同志社大学人文学会『人文学』205，147-167
山本佐和子(2021)「中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法」『筑紫日本語論叢Ⅲ』風間書房，105-131
山本佐和子(2022a)「資料紹介　静嘉堂文庫蔵五山版『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』（零本）書入れ仮名抄　解説・翻刻―「書入れ仮名抄」の機能―」『同志社国文学』96，65-86
山本佐和子(2022b)「彭叔守仙抄「古文真宝抄」の諸本について―抄物の成立と受容の一斑―」『筑紫日本語研究』2021，掲載頁未定

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山本佐和子	４．巻 3
２．論文標題 中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法	５．発行年 2021年
３．雑誌名 筑紫語学論叢―日本語の構造と変化―	６．最初と最後の頁 107-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本佐和子	４．巻 92
２．論文標題 中世室町期における「ゲナ」の意味・用法―モダリティ形式「ゲナ」の成立再考―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 同志社国文学	６．最初と最後の頁 170-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本佐和子	４．巻 205
２．論文標題 大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』の書誌的考察―東坡詩の抄物の受容と展開の一例―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文学	６．最初と最後の頁 147-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本佐和子	４．巻 91
２．論文標題 〈資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)	５．発行年 2019年
３．雑誌名 同志社国文学	６．最初と最後の頁 40-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山本佐和子	4．巻 38
2．論文標題 嵩山房刊「唐詩選」関連書籍群における注釈表現の諸相	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 185-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本佐和子	4．巻 90
2．論文標題 〈資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓（とうしせんききがき）』五言絶句編（上）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同志社国文学	6．最初と最後の頁 149-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本佐和子	4．巻 88
2．論文標題 〈資料紹介〉京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵「古則聞書零本」翻刻・解説	5．発行年 2018年
3．雑誌名 同志社国文学	6．最初と最後の頁 50－66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本佐和子	4．巻 2016
2．論文標題 『唐詩選和訓』における繋;辞「ジャ」の用法‐嵩山房刊「唐詩選」和語解類の文体‐	5．発行年 2017年
3．雑誌名 筑紫プロシーディングス	6．最初と最後の頁 121-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山本佐和子
2．発表標題 漢籍国字解の文末形式の位相性―『漢籍国字解』と『唐詩選画本』の相関関係―
3．学会等名 第118回　国語語彙史研究会
4．発表年 2018年

1．発表者名 山本佐和子
2．発表標題 「～トナリ」の語史
3．学会等名 第81回　中部日本・日本語学研究会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関